

延慶本平家物語における

文覚・六代説話の形成

小林美和

はじめに

「脚は口を載せ、口は金言を宣説する⁽¹⁾」とは、唱導文芸の本質を一言でいい当て、蓋し名言というべきであろう。旅をする文芸の多くが、中世にあつては神社の教理宣揚、即ち唱導を旨としていたことは、今日では広く認められるところである。柳田国男氏が民俗学の立場から『平家』に有王と名乗る旅法師の語りの参加を考へられてから既に三十数年が経つが、その問題意識はいまだに新鮮である。

本稿は基本的にはこれと同一の視座に立ちながら、延慶本平家物語に取り込まれている文覚発心譚、六代説話を語り物生成の立場から、その遡源を意図するものであると同時に、延慶本の一特質を明らかにせんとするものである。即ち、『平家』諸本の本説話を徴するに、延慶本のそれが最も唱導文芸の語り物としての原態性を保持しているとの見通しに立つものであるが、テキスト全

体の原態性と直結させることは、一応ここではさし控えたい。

延慶本の説話生成の過程については、最近武久堅、砂川博両氏らによる積極的な御発言があり、『平家』研究における延慶本の重要度が更に認識を高めつつあり、今後もこうした動向は一層の進展をみせるものとおもわれる。本稿もこれらと軌を一にするものであるが、具体的には、夙く筑土鈴寛氏が指摘された延慶本の念仏聖色⁽⁴⁾の一端を生成論の立場から、俊乗坊重源一流の唱導活動に求めたものである。

註(1) 沢田瑞穂氏『仏教と中国文学』一頁。

(2) 「有王と俊寛僧都」(『物語と語り物』定本七)。

(3) 武久氏「大將争い事件の構想——延慶本平家物語成立過程考——」(広島女学院大学国語国文学誌第四号)。砂川氏「延慶本

平家物語俱利伽羅落の生成」(『文学』50・7)。

(4) 「平家物語についての覚書」(『復古と叙事詩』所収)。

一、延慶本と別所系念仏聖の文芸

宝幢院本願云、「むかしの上人は、一期、道心の有無を沙汰しき。次世の上人は法文を相談す。当世の上人は合戦物語云々」

(一言芳談)。

鎌倉初期、別所を中心とする高野聖たちによって盛んにいくざ物語が語られた様子が眼に浮かぶが、これら別所は念仏行者ばかりでなく、勸進にひいては諸国回遊の芸能僧の依り集うところであつた。高野では萱堂聖、蓮華谷聖などの唱導がことに有名であり、彼等の持ち伝えた語り物は、中世小説「三人法師」、「高野物語」、「為世の草子」などの発心・懺悔譚に面影をとどめている。

『平家』諸本の描く文覚像は明らかに勸進聖の姿を呈しているが、平安末期から鎌倉時代にかけて、高野、四天王寺、善光寺は当時の融通念仏すむる勸進聖の主要な活動ルート⁽³⁾を形成していた。彼等の勸進活動はきわめて芸能的色彩をおびたものであり、後に問題にする俊乗坊重源もかかる勸進聖の一人であり、東大寺大仏殿再興における勸進活動は夙に知られるところである。こうした勸進聖の芸能については、例えば謡曲「自然居士」などに明らかであり、世阿弥の伝書「五音」に引かれる一節によれば、彼はまた山林抖擻の聖であつた。

いわゆる読み本系の『平家』諸本が載せる文覚発心譚の生成基盤が、そのパターンからみて、こうした唱導の徒の布教活動にあつたことは疑い得ぬところである。古代律令体制の解体、それに

即応する鎮護国家仏教の崩壊⁽⁵⁾を契機に輩出をみたころの聖の階層が展開した、別所を中心とする浄土教が、宗教史的にみれば、「それ自体単独には民衆の教化に大きな成果をあげ、伝道の結果教団を組織し、それを拡大し、やがては既成教団の土台を掘りくずして行くような存在ではな⁽⁶⁾く、また室町期における高野聖の世俗化の一因に彼等の芸能的唱導活動が掲げられようと、それらが中世の文化全般にわたつておよぼした深い痕跡に眼をとざすことはできないであらう。

現世出離の志と恩愛の道の相剋に激しく苦悩しながら禁欲、苦行の極へと遍歴を重ねる「三人法師」の六郎左衛門、石童丸の父、加藤左衛門尉の生き方は、また延慶本編者の強く興味を示すところであつた。他の『平家』諸本に比して、延慶本にこのような発心譚がきわだつて多いことは、やはり注目されねばなるまい。延慶本の高野色については麻原美子氏の研究があるが、その発心譚は多く高野の別所に繋る念仏聖系のものである。

例えば、平宗盛の末子、宗親の発心譚は延慶本に特有なものであり、その説話形成の基盤を考えるに有効なものであろう。

平家滅亡後、高野聖となり、信戒房と名乗って、一旦は大仏の聖(重源)と共に渡唐をするが、帰朝後、「居所も定メス雲風ニ跡ヲ任⁽¹⁰⁾」す山林抖擻の生涯を送り、その風体といえは、

人ニモアラス、ヤセクロミタル法師ノカミキヌノキタナキガワ
ラノトヤレタルカウヘニ、アサノ衣ノコ、カシコ結ヒ集メタ
ルヲワツカニカケツ、片方ヤフレ失タルヒカサヲキタリ

という惨憺たるものであった。「迷ヒアリ」くことによつて、「イサ、カモ心ヲケカ」すまいとする徹底した現世との結縁拒否の精神は、「物狂」として古代のうかれ人の血縁をひき、添い寄る小法師をあくまでも近づけまいとするそのかたくなな姿は、既に石童丸の父、加藤左衛門尉の原型たり得ている。

『一言芳談』にも、この信戒房(心戒に作る)が「三界六道には、心やすくしりさしすへて、あるべき所なきゆへ」に常に踞居していたという伝承がみえるところから、その漂泊ぶりは余程有名であり、さらに注目されるのは、『発心集』が延慶本とほぼ同文に近い説話を載せる点である。『発心集』は説話の末尾に編者独自の評論を付している。両者の関係については慎重であらねばならないが、更に延慶本十一「時頼入道々念由来事付永観律師事」の永観説話は『発心集』第二「禅林寺永観律師の事」との密接な関係を示している。信戒にしても永観にしても念仏聖としての姿勢が称えられており、同じく「もし人出世の要を問へば、答ふるに念仏の行をもてせり」と永観の念仏者としてのあり様を紹介する『拾遺往生伝』の記述様式と前二者が凡そ異なる点が、むしろ延慶本、『発心集』の説話収集源の交差を示唆しているものと思われる。

「別所の説話」⁽¹³⁾との繋がりには延慶本の一特質をあらわしているといえるが、別所はまた諸国勸進の芸能僧の依り集うところであった。私は、最近の石川県羽咋郡富来町での昔話採訪に際して、同所三明の地に当地を以て俊寛流罪の鬼界島とする伝承が存し、

熊野神社が祀られていることを知った。高野聖の広範な唱導活動の一端が窺われ、まことに興味深い。これら漂泊の宗教者が在地の共同体にもたらした影響の根深さには感嘆禁じ得ない。

中世は、さまざまなる神を担う宗教芸能者が都鄙に横溢した時代であり、その伝播の広範さと芸能の多様なヴァリエーションにその一端を把握することができよう。それは単に漂泊者の定住社会への侵犯という一方的作用ではなく、中世という社会が漂泊する神々と「人びとのもつとも素朴な原罪意識」といふべきものとの間の相乗作用を最も豊かに展開したということであろう。

いく分簡略にすぎたようであるが、私は以上の視野に立って、延慶本の文覚発心譚、六代説話の生成基盤を勸進聖重源配下の女流念仏集団の唱導活動に求めたいと思う。

大方東大寺ノ俊乗房へ、阿弥陀ノ化身ト云コト出キテ、ワガ身ノ名ヲバ南無阿弥陀仏ト名ノリテ、万ノ人ニ上ニ一字ヲキテ、空阿弥陀仏、法アマミダ仏ナド云名ヲツケ、ルヲ、マコトニヤガテ我名ニシタル尼法師ヲ、カリ(愚管抄卷六)⁽¹⁶⁾

専修念仏を標榜する重源のもとに多くの念仏者が参集して熱狂的な宗教現象を呈していたことがわかるが、五来重氏⁽¹⁷⁾によれば、彼もまた芸能集団の濃い融通念仏の徒であった。また、右の記事で重源が念仏比丘尼を多く配下に従えていた点は注目したところである。

非業の死の顛末を語るものが亡き霊の供養のみならず、語り手の滅罪・往生を指示するものであってみれば、このような唱導の

語り物文芸の盛行の意味も推しはかられよう。

- 註(1) 古典文学大系本による。ただし、本稿引用文の旧漢字は出来るだけ現行のものに改めた。
- (2) 五来重氏「一遍上人と融通念仏」(大谷学報四十一巻八号)。
- (3) 五来氏前掲論文、『高野聖』。
- (4) 「カヤウニ思ヒシヨリジネン心エ、今ハ山フカキスミカラ出、カ、ル物グルイトナリ」(能勢朝次氏『世阿弥十六部集評釈』下による)という一節が見える。
- (5) 井上光貞氏『日本浄土教成立史の研究』「聖・沙弥の宗教活動」。
- (6) 大隅和雄氏『聖の宗教活動』(『日本宗教史研究』1)。
- (7) 五来氏「室町時代における高野聖の世俗的活動」(大谷学報三十九巻四号)。
- (8) 「平家物語と高野園―説話と管理園を問題として―」(『軍記物とその周辺』所収)。
- (9) 十二、阿波守宗親発道心事
- (10) 引用は古典研究会影印本による。適宜句読点を付す。
- (11) 第七心戒上人跡を留めざる事
- (12) 日本思想大系本による。
- (13) 益田勝実氏「偽悪の伝統」(『火山列島の思想』所収)の用語による。
- (14) 立命館大学説話研究会の採訪に同行したもの、以下は引率の福田晃教授の御教示による。
- (15) 高取正男氏『仏教土着』一九四頁。
- (16) 日本古典文学大系本による。
- (17) 註(3)に同じ。

延慶本平家物語における文意・六代説話の形成

二、重源と渡辺の念仏衆

東大寺大仏殿再興の勸進で名高い俊乗坊重源はまた高野聖の一人であり、延慶本に、

彼春乗房上人ト申ハ右馬大夫季重孫、右衛門大夫季能子也。上醍醐法師也。東大寺造宮ノ勸進ノ上人ニテ情オワシケレハ三位中将ノ首ヲモ北方ヘ奉リニケリ。権者ニテオワシケレハ慈悲モ深クオワシケルニヤ(十一、北方重衡ノ教養シ給事)

と、重衡北方が夫の遺骨を高野に送るに便宜をはかった聖として登場している。この両者の交渉については、『東大寺統要録』に、大仏鑄造に際し重衡妻室が「重衡所持物内以_二金銅具_一令_レ奉_二加之_一」たところ、重準が慈悲を垂れ造仏の資とするやいなや、忽ちに炉が破裂してしまつたと、重衡の罪業の深さを説く記事を載せ、『東大寺造立供養記』にも同様な記事がみられるところから、ほぼ事実と推してもよいであろう。

重源は養和元年八月、大仏再興の宣旨を蒙り、一輪車六両を仕立て配下の聖たちをして「七道諸国」を勸進せしめた。その意図するところは、

伏乞十方一切同心合力莫_レ謂_二家々清虚_一只可_レ任_二力之所_一能尺_二布寸鉄_一雖_二一木半錢_一必答_二勸進之詞_一各抽_二奉加之志_一

という彼自身の敬白文(東大寺統要録)の一節に明瞭であろう。その集団的勸進能力は当時にあつては卓抜したものといえ、『元亨(2)積書』に「源巧画妙計。運転如_レ神。梓人皆附而乞_二指授_一」と称

賛される優れた建築技術とともに、重源が大仏再興の宣旨を受ける直接的要因をなしたはずである。

聖の芸能の出発点は、まさしくこうした勅進唱導に求められるといえ、重源一流のこの方面での活躍は、重源自筆の『南无阿弥仏善集』に記された夥しい作善にあらわれている。

重源はまた高野聖として殊に著名で、新別所専、修往生院の経営は注目されてよい。『紀伊統風土記』所収の「非事吏事歴」によれば、重源は自らを魁首とし、二十四名の社友からなる蓮社を結んでいた。いわば念仏結社であり、その社友には齋所聖寂阿弥、八条阿波守宗親入道心戒房幽阿弥（先に触れた宗親であろう）、滝口入道時頼多門坊淨阿弥、熊谷次郎直実蓮生法師、有王丸入道西阿弥など、いずれも高野唱導文芸に名高い人物が掲げられている。これらの伝承をそのまま鵜呑みには出来ないとしても、こうした伝承の生みだされる基盤には、高野唱導文芸と密接にかかわる重源一流の宗教家たちの活動が存在したはずである。

更に、これら専修往生院の社友につけられた阿弥号に触れておけば、先に掲げた『愚管抄』の記事にみられるように、重源自身、南無阿弥陀仏と名乗り、彼に従う念仏衆に阿弥号を与えたものである。『南无阿弥陀仏作善集』（以下『作善集』と略記）に「阿弥陀仏名付日本国貴賤上下事、建仁二年始之成廿年」とあり、逆算すれば重源の阿弥号開始は、寿永二年（一一八三）頃となる。後に問題にする延慶本の文覚発心譚で、後の文覚こと盛遠は盛阿弥陀仏、刑部左衛門尉は渡阿弥陀仏と名乗る点は、重源の阿弥号との

関連に於いて殊に注目されてよく、物語の展開に即していえば、この二人は出家と同時に重源門下となったことを意味している。

延慶本には総じて重源に関する記事が多く、且つそれらは先の重衡妻室記事の例の如く称賛に満ちた態度で一貫されている。十二「土佐守宗実死給事」もその一である。

小松重盛の末子、土佐守宗実は幼少より左大臣経宗の養子となっていたが、平家没落に際し左大臣家を追放され、俊乘房重源をたよる。重源はこれを憐れみ、東大寺油蔵にすえ置き、頼朝に懇請してその助命の許しを得、生蓮房と名乗る高野聖として蓮華谷に住わせた。しかるにその後、同じく重盛息、伊賀大夫の反乱が出来し、鎌倉に召される途次、断食十三日目にして足柄山近辺で果てたというものである。

ここでも重源は前面に押し出されているが、『吾妻鏡』⁽⁴⁾には、宗実の助命を懇願したのは養父経宗自身とする記事がみられ、重源については触れられてはいない。これによれば延慶本の説話構成は、重源を仰ぐ高野聖たちによって文芸化された唱導説話を素材としているといえ、宗実の断食には、これら聖たちの苦行の一である断食行が反映されているといえる。宗実の高野入のみを記さない。『平家』他諸本（長門本を除く）の記事構成は、むしろ退化したものとすべきであろう。また、延慶本の記す「高野山蓮華谷ト云所ニ住シテ生蓮房トテ近マテオワシケルヲ」という件は、屋代本の記す建久八年十月の宗実死亡期日を基軸に考えた場合、説話の生成時を示唆するものとして注目したい。

さて、以上の点などから重源を頂点とする念仏聖の二団によつて、盛んに唱導の文芸が生成、伝播をみたことは確実といえるが、延慶本はまたこれらの説話をかなり原態に近い形で採り込んでいる一本と思われる。

延慶本の文覚発心譚、更には六代説話の生成基盤を考える際に注目してみたいのは、重源と渡辺の念仏聖、比丘尼との関係である。重源は播磨、周防、伊賀などに七別所を建立し、さまざまな作善を修して衆庶の勸進唱導を行っているが、摂津渡辺の別所もその一である。『作善集』によればその規模は、一間四面浄土堂一字、来迎堂一字、娑婆屋、大湯屋、一間四面小堂各一字の他に、銅五輪塔一基、鐘一口、迎講用の天童装束三十具、同菩薩束二十八具、楽器、一千余体の印仏一面を備えるといつたものであった。この渡辺別所にはかなりの念仏衆が依拠していた。重源は各地で盛んに迎講を修しており、その開始は『作善集』によれば、建久八年（一一九七）、渡辺別所におけるものであった。迎講は演劇的要素の濃厚な念仏行の一で、その演出には相当の人員を要した。現在、東大寺には重源が渡辺別所で使用した迎講用の鉦鼓が存する。

中でも注目したいのは、建仁元年（一一二〇）九月の渡辺別所における迎講である。『百鍊抄』によれば、この時は後鳥羽上皇の御幸もあり、その盛大さが想像されるが、重源はその功により八条女院暲子内親王から、渡辺浄土堂（別所）念仏衆供料、仏性燈油料等として、摂津頭成庄の施入を受けている（作善集。詳し

くは後に触れるが、迎講は一種の念仏芸能として、各地の多くの芸能に繋がってゆくものであり、当時重源の渡辺別所に念仏衆が集い、芸能的唱導活動の拠点をなしていたことには注意をしたい。摂津渡辺といえは、『平家』では宇治橋合戦における渡辺党の活躍が思い出される。頼政配下としての渡辺党の奮戦は『山槐記』などの記録によつて、ある程度事実として確かめられるが、それが『平家』にみられるような伝承にまで発展するには、やはり渡辺党の唱導活動の介在が推測される。渡辺の渡渉地点に依拠し、独自の信仰を奉じて唱導芸能に関与していた渡辺党の活躍がしのばれるが、私は、重源配下の渡辺念仏衆も渡辺党とかなり深いところがかかわっていると考える。

文覚の出自が渡辺党と深く関係していることは既に指摘されており、殊に『遠藤系図』（統群書類従本）が、盛遠（文覚）と宇治橋合戦で活躍をみせる渡辺党の満、省などの共通の先祖とする為方に「自是当国渡辺総官職始也。此時自宇治里渡辺ニ移住也」と注記しているのは、宇治と渡辺党の関係をあらわしている興味深い。また、文覚発心譚を載せる読み本系『平家』諸本は全て、文覚が渡辺党の出自であることを明記しており、殊に延慶本の本説話は渡辺との地縁的紐帯を濃厚に感じさせている。

さて、重源も渡辺党の出自ではないかと説かれたのは近藤喜博氏である。氏の論拠は、重源の高野新別所、専修往生院円通寺の重源木像の説明札にその由が記されているという点にあり、重源の建築技術もその出自に求められる。今のところ、これは一つの

可能性の提示ということにとどまろうが、やはり注目したいのは、こうした伝承の存在によって推測される重源と渡辺党の結びつきである。重源と文覚の親交は諸種の記録にみられ、例えば『吾妻鏡』建久四年一月十四日条には、重源が文覚を通して東大寺大仏殿造営の苦難を鎌倉幕府に愁訴し、援助を乞うた旨がみられる。重源と渡辺念仏衆の唱導活動は、さらに天王寺の唱導との繋がりから把握してゆく必要があると思われるが、それは次の両説話の展開に即してみたい。

註(一) 続々群書類従本による。

- (2) 新訂増補国史大系本による。
- (3) 『俊乘房重源史料集成』に翻刻されている。
- (4) 文治元年十二月十七日、二十六日条。
- (5) 近藤喜博氏「難波の渡辺党」上中下『国学院雑誌』S 36・5、6、8号。
- (6) 文覚の年譜についての詳細な研究には、山田昭全氏の「僧文覚略年譜考」(立教大学『日本文学』12号)がある。
- (7) 「文覚譚の渡辺党」『南都仏教』13号。

三、延慶本文覚発心譚

読み本系諸本文覚発心譚異同				
	延慶本	長門本	盛衰記	
A	抑文学カ道念ノ由緒ヲ尋レハ女故トソ聞ヘシ	抑文覚が道心の因縁を尋ねれば、れんぼがふれいのすさび、愛別離苦のかなしみにもよらざりけるに依てなり	文覚道心の起を尋れば女故也けり	ナン
B	遠藤右近將監茂遠カ子渡辺ノ遠藤武者盛遠トテ、上西門院ノ武者所ニテ(以下称揚文)	コノ項特ニナン	渡辺党に遠藤左近將監盛光が一男、上西門院の北面の下屬也	渡辺党遠藤左近の將監持遠の子、遠藤武者盛遠として上西門院の衆
C	故三条ノサヘキノ頭ノ娘鳥羽ノ刑部左衛門カ女房	文覚外戚の叔母衣河殿娘左衛門尉わたる妻	文覚内戚の姨母衣川殿娘あとも、異名袈沙・並びの里の源左衛門尉渡妻	鳥羽の秋山の刑部左衛門俊乘妻、世佐の尼の娘

K	J	I	H	G	F	E	C
尼公天王寺に参り次年十月八日五十五歳で没。	女房は観音の化身・両方に尼法師になるもの三十余人。	盛遠女の舍利を取て後死に墓を築き、三年の間行道念仏をして後世を訪う。	刑部左衛門・盛遠共に出家し、渡アマミダ仏、盛アマミダ仏と名乗る。	盛遠、女房の申し出によってその夫の殺害をはかるが、女房の計略で彼女を殺害。盛遠、命を刑部左衛門に投げ出す。	盛遠悲嘆のあまり、病床につき、尼公の糾明にあつて本心吐露。尼公、娘をよびよせる。	母の尼公に仕え女に会う機会を伺うが、果たさず苦惱のうちに三年を過ごす (cf 源氏桐壺)	渡辺橋供養の時、渡辺橋結縁説法の師によって、文寛、女房の身元を知る。
同、次年八月八日四十五歳で没。	同	女房をトリベ山に送る。	同	ホ、同	尼公、命惜しさに娘をよびよせる。	盛遠一分のじひもなく、衣河殺害をはかる。	ナシ
同、次年十月八日四十五で没。	同	延本に同	同	ホ、同	長本に同	盛遠は慈悲なく、春から秋まで案じた末衣川の殺害をはかる。	渡辺橋供養の時奉行する
ナシ	ナシ	女房の骨は二分して首にかけ修行。	二人共に出家、俊乗は入唐して帰朝の後、大仏勸進聖俊乗房上人と名乗り、盛遠は文寛と名乗る。	?	文脈不明、延本の梗概的内容か	尼の元へ行き、長谷寺の示現として、尼の養子となる。	永万元年渡辺橋供養の時、持遠は花籠を持ってわたり、盛遠は薪を背負て……

文覚その後熊野・金峯天王寺を
はじめ、日本中の靈地をめぐる
こと十三年、また兼平、光源氏
の跡を訪い、ありがたき木聖と
なる。

高野粉河山々寺々を修業

日本中を修業

山々寺々を修業

延慶本の文覚発心譚は独立説話としての性格が強く、素材となつた唱導文芸を比較的原態のまま取り込んでいると思われる。例えば、本説話の前に接続する「兵衛佐頼朝発謀叛由來事」において、「彼ノ文学ハ在俗ノ時ハ遠藤右近將監茂遠カ子ニ遠藤武者盛遠トテ上西門院ノ衆ナリケルカ」と文覚の出自を紹介しながら、発心譚冒頭で同一の説明を繰り返しているのは、その原態性故の重複と思われる。また、冒頭部、

抑文学カ道念ノ由緒ヲ尋レハ女故トソ聞ヘシ

という表現は、本書時頼発心譚冒頭部と全くの同型を示し、語り物「六代御前物語」の末尾に記された「瀬口カユライオタツ又レハ本ハ三条サイトウサエムム」といった語り口とも同じパターンであるところから、発心をテーマとした語り物文芸の常套句といえる。

さて、延慶本の文覚発心譚の大きな特質は、先にも触れたように、渡辺の地が構想上重要な役割を果たしているという点である。延慶本は盛遠と刑部左衛門妻との出会を渡辺橋結縁供養の時とする。

渡辺橋供養之時希代ノ勝事ナリケレハ、江口、神崎、桂本、向、住吉、天王寺、明石、福原、室、高砂、淀ヤ、河尻、難波方、金屋、片野、石清水、ウトノ、山崎、鳥羽ノ里、各ノ歩ヲ運ツ、霞ノ裏ニ殊ヲカケ長柄ノ橋ノ如クニテ不朽トソ祈ケル。

盛遠はこの場で、結縁説法の最中、「二カワラノ船」で下ってきたる、十六、七の「青キ黛緑ニシテ咲ナル貞ハセ花ニ似タ」る実に優なる女房との邂逅を果たすわけであるが、事實譚ではない語り物文芸におけるこうした場の設定は重要な意味を持つものと思われる。いわば語りにおける場の論理がここにも作用しているといえ、それは語りの伝承者、背景を指向するものである。

右の引用部では、渡辺橋供養を前面に押し出そうとする想図がみられ、描写は細密、且つ「下人冠者原ニ至ルマテサワノトシテソ見ヘケル」といったように、一種の実在感を湛えている。これらの要素は、まさしく渡辺の唱導を感じさせるところであるが、この橋供養宣揚の姿勢には、いま一つの背景をよみとってみたい。それは渡辺橋供養結縁の師が他ならぬ俊乗房重源であったという点である。「作善集」は、

渡辺橋井長羅橋等結縁之

と、明確にその業績を記している。この点は、延慶本右引用部に「長柄ノ橋ノ如ク」とあるところから確實とみてよいであろう。

とすれば、ここにはまた重源宣揚の意図が働いていることとなる。この結縁説法の師は、延慶本では「此上人」「聖」として登場し、遂に固有名詞「重源」の名はあらわれない。しかし、このことは返って、この語り物にあっては、重源の名が語り手と聴衆の了解事項であったことを思わせ、或はその指示語の用法から絵解き台本である可能性も感じさせる。

文覚は、女房の身元を知ろう欲しつ、折からの火事騒ぎでその機を失し、落胆のうちにその地で夜を明かし、翌朝「京都アマタ見給ヘル」「此上人」即結縁説法の師の庵室を訪れ、かの女房が故三条佐伯の頭の娘、鳥羽の刑左衛門女房であることを知る。聖の庵室は重源の渡辺別所を彷彿させ、その遊行聖的性格も勸進の聖、重源にふさわしい。

さらに、刑部左衛門が出家を請じた「年来ノ師匠」は、刑部左衛門、法名渡阿弥陀仏、盛遠、法名盛阿弥陀仏と阿弥号を冠しているところから、重源の面影が濃く、また、刑部左衛門の法名、渡阿弥陀仏の命名は、その名が渡であつたとしても気にかかるところである。

以上の点から、延慶本の文覚発心譚の背景には、渡辺と重源を結ぶ線、即ち渡辺党独自の念仏衆の存在が考えられ、その生成、唱導活動に深く関与していることが推定される。

延慶本平家物語における文覚・六代説話の形成

その点を他本に徴するに、渡辺橋供養の件は一応記すものの（但し、長門本のみこれを記さない）、延慶本の如き詳述は一切なく、重源とおぼしき結縁説法の師も登場しない。盛衰記などは、かの女房が盛遠の叔母、衣川の娘で、かねてよりの顔見知りであるとするところにより、橋供養の場設定の構想意図を全く失っている。また、重源に関して今一つ触れておきたいのは、四部本の記述である。四部本の本説話は、凡そ語り物的性格からは程遠く、記述も簡略であるといえるが、諸本に比して特異な点は、盛遠の恋仇、刑部左衛門こそ俊乗房重源であるとするところである。しかし、この記述はあまりに史実とかけ離れており、たとえ対象が語り物文芸としても、この荒唐さは語りの担い手たちの許容範囲をはるかに越えるものと思われる。

その具体的理由を簡単に記せば、まず四部本の刑部左衛門盛遠の同時出家説は年代的に成立しない。重源は文覚より十六歳程年長で、長承二年（一二三三）、十三で出家しており、四部本では橋供養を永万年（一一六五）とし、出家はそれ以後とみなされるところから、四部本の記述は少くも三十二年以上史実を誤っていることになる。また、諸本の文覚十八歳出家説をとれば、それは久寿二年（一一五五）となり、いづれにしても両者の同時出家説は全く成立せず、永万年説も可能性を欠く。

以上の諸本の性格、構想上の欠陥は、延慶本々説話の原態性、渡辺を背景とする唱導語りの可能性を傍証するものと思われるが、次に文覚の造形の面から延慶本の独自性をみてみる。

まず、延慶本には盛遠称揚の態度がめだつことである。冒頭の盛遠紹介部分、盛衰記などがその出自の末に「下藤也」と簡潔に叙しているに對し、延慶本のみは、

久仕龍顔ニシ施飲羽ニシ之三威ツ、專侍鳳闕ニシ振射鵬ニシ之名譽キ

と美化している。このような表白体は延慶本の本説話には随所にみられ、一特色をなしているが、それが原語り物の一要素をなすのか、或は延慶本編者による編集句を意味するのかは、必ずしも明確ではない。しかし、この盛遠称揚句は本説話全体の文覚造形態度と明確な照応をみせている。

延慶本の描く盛遠は、きわめて女性的、禁欲的人間像であるといえる。渡辺橋結縁の聖によって、かの女房の身元を知った盛遠は、三条西洞院付近に女房の母、尼公を訪れ、彼女に仕えて目当ての女房に遭う機会を窺うことになる。その間の様子を延慶本は次のように記す。

男此後ハ万ツ深ク取入テ明ヌ晩ヌトスクシツ、ヒタスヲ女ノ事ノミ深ク心ニカ、リテ、サリトモ、ミテハハテシト心深ク思ヘトモ、適キタル時ハ車ニテ妻戸深ク遣入レハ行モ返モ忍テ形ヲタニモミセス、此ニ付テモ愁ニ今ハ即打臥ヌ

この辺り、延慶本はなおも、張文成と則天武皇の故事を引きつづ、盛遠の苦悩、「モダエ」を連綿と綴っている。しかも、このようにして空しい三年の月日が過ぎて、尼公の激しい糾明にあって、盛遠は「面ニ火ヲ焼」思いで漸くにして年来の恋を打明けけるに至る。おそろしく女性的、内向的な盛遠像というべきであろう。

これに對して、盛衰記、長門本の描く盛遠像はきわめて対照的といえ、まさしく悪党的な人間像となり得ている。即ち、盛衰記の盛遠は、かねてより妻にと申し入れていた袈裟御前を刑部左衛門の妻としたことを理由に伯母衣川の殺害を図り、脅迫の末、遂に袈裟御前を呼び寄せさせることになる。

盛遠は慈悲なし目を見はりて、伯母也とても、我を殺んとし給ふ敵なれば、遁すまじ渡辺党の習として、一目なれども敵を目に懸て置ず、すはく只今指殺んとして、腹に刀をひやくと差当たり(国民文庫本)

この辺り、「慈悲なき」盛遠の悪党ぶりが際立っているところである。長門本となると更に唐突であり、いきなり、

衣河のもとへものゝふ一人来りつゝ、さうなく刀をぬきて、ぜひなく衣河を取おさへて殺せんとす(国書刊行会本)

と、衣河殺害の挙に出ている。

以上で明らかかなように延慶本の甚だ女性的、内向的な盛遠像と盛衰記、長門本の男性的、悪党的盛遠像は極めて対照的である。そのことは同時に、両者の渡辺党に對する記述態度の位相をもあらわしている。延慶本で美化称揚される盛遠の渡辺党は、後者において、その無法ぶりがあらさまに暴露されているのである。

結句のところ、こうした盛遠像の位相は、各々の生成基盤のズレを示唆するものであり、延慶本の女性的な盛遠造形は、女語り即女流念仏唱導の徒の管理にかかわる語り物を原拠とする投影とよみとりた。渡辺は「水靈奉仕の女流唱導」⁽⁴⁾者の依り集う地で

あり、浅羽本渡辺系図(統群書類従)の記す

悟滝口左衛門尉——渡武者所左衛門尉
出家後号渡阿

という、刑部左衛門尉の面影も、これら唱導活動の痕跡を残すといえるのかもしれない。また、重源門下に念仏比丘尼たちが多くいたという、前掲の『愚管抄』記事にあらためて注目したいところである。

盛遠に契りを強要された女房は、一計を案じ、自らを夫刑部左衛門とみせかけて、盛遠の手にかかりあえない最期を遂げる。延慶本では、この女房の貞節が強調されており、盛衰記、長門本の如く、盛遠と一夜を共にはしない。自らの誤りを悟った盛遠は、「我頸ヲ千キタ百キタニモキサミ給へ」と自らの命を刑部左衛門のもとに投げ出すが、刑部左衛門は遂に憎しみを乗り越え、女房の死を善知識として、発心、共にその後世を訪わんと述べる。

情案ルニ此女房へ観音ノ垂迹トシテ吾等カ道心ヲ催シ給フト観スヘシ

まさしく女性唱導を彷彿させるところであり、この時双方に尼法師となる者三十余名にのぼったとする。「イト、女ノ身ハ罪ヲカキ事」に言及し、女房の苦衷を連綿と述べてたる延慶本の語り口は、まことに女語りにもふさわしいと思われる。勧進の念仏比丘尼の唱導が想定されるが、これら唱導の徒は、また渡辺に近接する天王寺とも深い関係をもっていた。盛遠と娘を引き合わせることに、その死の直接の原因を作った母の尼公は、「イト、目モクレ心モキヘテモタヘコカ」れて、天王寺に籠り、念仏三昧の

うちに、翌年十月八日五十五歳にして、終に往生の素懐を遂げる。

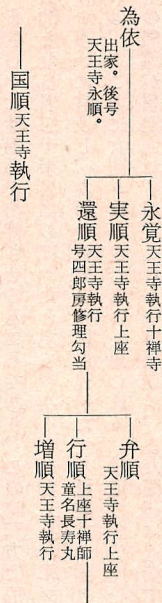
天王寺は当時、念仏信仰のメッカをなし、各地の念仏の徒の集参地の観を呈しており、殊に『荒陵寺御手印縁起』(統群書類従本)に、「宝塔金堂相当極楽土東門中心」とある如く、その西門は極楽浄土東門に結直する聖地として衆庶の信仰を集めていた。この西門の外には新別所があり、『天王寺旧記』(統群書類従本)には、康治二年十月、藤原忠実、頼長父子がここで「念仏礼讃」した由がみえる。また、西門外の念仏所には度々白河法皇の御幸があり、迎講などの念仏行事が催されている。久安三年九月の御幸に際して、同『旧記』に「次幸繪堂令説障子伝」とあるのは、絵解きの演行を意味するものであろう。

延慶本では、前節で触れた宗親入道の妹、理円房を天王寺の念仏比丘尼とし、更に十一「経正ノ北方出家事」は、天王寺と渡辺の關係の密なるを記していて興味深い。経正北方は平家の残党狩りて愛児を失い、首を懐に入れ、天王寺で百日の無言念仏を修し、満願の日、渡辺川に行き、高声念仏千返唱えて川に身を投じたという。この女房は鬪毘尼の呼称が与えられているが、その所行は水霊に仕える鬪毘尼を想起させるところであり、後代の記録に残された天王寺の巫女村などもその系脈をひくのかも知れない。

当時、天王寺西門近辺はさまざまなる念仏唱導、遊芸の徒が寄り集い、人々を阿弥陀讚仰、欣求浄土の世界にいざなうという、唱導文芸・芸能の母胎、一大集参地としての機能を果たしていた。そして、渡辺の唱導の徒のこの場への参加も、十分推定できると

ころである。

渡辺党と天王寺の間には古来深い関係があったものと思われる。先にも触れた渡辺の『遠藤系図』の一部を次に抜き出してみると、



という記述がある。もとより、これらをすべて事実と認めるわけにはいかないが、両者の繋がりについては知ることができよう。

また、『吾妻鏡』嘉禎三年八月十三日条には、天王寺執行一族、上座寛順が、「欲レ保天王寺」て、兵二百余名を率いて渡辺党との間に鬭諍を引き起こした由がみえる。おそらく、天王寺の利権をめぐる争いであったと思われる、これによっても、両者の関係の密なる事が知られる。

また、重源も天王寺との関係は深い。『作善集』によれば、天王寺御塔を修復すること一度、舍利供養二度、更に先に触れた西門で百万遍念仏を催すこと度々に及んでいる。これは重源が勧進念仏集団の領袖であったことからすれば当然であり、渡辺、天王寺一帯における重源の影響力は相当のものであったと推される。

さて延慶本によれば、出家後の盛遠は女の舍利を取って後苑に墓を築き、三年の間、行道念仏に専心して後世を訪うたところ、墓の上に蓮華の開く夢を見、歡喜の涙に袖をしぼるに至る。まさ

しく念仏唱導文芸のさわりというべく、享受者の涙を誘うところである。道心いや増した盛遠、盛阿弥陀仏は高野、熊野に籠り、はてには金剛八葉の峰、熊野全峰、天王寺をはじめとして日本中の霊地をめぐり、禁欲苦行の末、「後代モ有カタキホトノ木聖」となり、名を文覚と改める。これもひとえにかの女房のおかげであった。

延慶本は文覚修行の描写が殊に詳細で、更に注目したいのは、文覚に阿古屋の松、明石、須磨といった業平、光源氏の遺跡を訪わせている点である。ここにも女語りの一端があらわれていると考えられる。

それとの関連で述べておきたいのは、延慶本の文覚発心譚の構想には『源氏物語』のモチーフが使われており、この点、次に述べる六代説話との構想上の共通性がよみとられることである。渡辺橋供養の場であつた女房の身元を聞き知った盛遠は、その母の尼公が住む、三条南、西洞院西の茨屋を訪れる。そして、

住アラシテ年久ナリ。築地破テ竹マハラナル檜皮屋アリ。是ナルラムト思テ立入レハ、空ク見四壁之中、旧昔封而交塵。漸望小住之辺、秋草閉而帶露。

という他住居で尼公は夫、佐伯頭に先立たれ、娘に家を明けられた悲しみを盛遠に述べることになる。このプロットは、明らかに『源氏』桐壺の巻における頼負の命婦の母君訪問の件りを借りているものといえる。六代説話の「若紫」援用と考え合わせると、両説話の生成基盤の共通性を思わせ、なお且つ、女流唱導者によ

る語りをあらわす一材料とみたい。

以上、俊乗坊重源と渡辺党、天王寺を結ぶ女流の念仏唱導集団に延慶本文覚発心譚の生成基盤を求めてきたが、次にその生成過程において、これと密接な関係にあると思われる延慶本六代説話をみてみたい。

註(1) 延慶二年六月筆写のもので、富倉徳次郎氏『平家物語研究』に

翻刻されている。

(2) いわば、唱導冒頭句の定型ともいうべきで、一例を掲げておけば、安居院流唱導書、或は一四世紀初頭の絵解き台本『正法輪蔵』などに頭著にみられる。

(3) 以下、この間の検証については、前掲『俊乗坊重源史料集成』と同じく前掲、山田昭全氏の論文を使用した。

(4) 近藤喜博氏、前掲『難波の渡辺党』。

(5) 三隅治雄氏『さすらい人の芸能史』一一〇頁。

四、六代説話の語り物性とその背景

中世、殊に中世前期の民間の語り物文芸については、必ずしもその実態が明らかになっていくわけではない。そのことは何よりも、これら民間語り物が、いわば生きた言語現象として、多くは文字に書き留められることもなく、常に流動変化を重ねていったからにはほかならない。

その中であって、前掲、延慶二年六月筆記の語り物『六代御前物語』の存在は注目される。これは、その体裁からみて「語り物の速記」⁽¹⁾と思われるが、水原一氏⁽²⁾はこれを手がかりとして、

延慶本平家物語における文覚・六代説話の形成

『平家』成立以前の六代の語り物の存在を推測されている。

六代とは、いうまでもなく那智沖の入水で知られる維盛の息。水原氏は同論文で、斎藤五・六兄弟を従者とする、助命後の六代の諸国一見の旅に注目され、その軌跡を以て、維盛・六代説話は勿論のこと、実盛・成親・重盛説話等、『平家』を形成する多くの説話生成源として捕捉する可能性に言及されている。関連説話の問題について言及する余裕は今はないが、少なくとも六代説話に関して、常に主、六代と行を共にした斎藤兄弟をして説話生成の素材源とする見方についての蓋然性は相当高いものといえるであろう。しかし、現在われわれが眼にする『六代御前物語』や延慶本の本説話は、民間語り物文芸として相当完成度の高いものに依拠していると思われる、斎藤兄弟の語りから本説話への流れの間には、やはりある程度の段階を措いて考えるのが妥当と思われる。私は、この間の経緯を必ずしも明らかにできないが、延慶本の本説話は、兄弟の提供した素材が高野などの念仏聖集団の唱導を媒介として、文覚の語りをよくするところの渡辺・天王寺一带蜷集の念仏比丘尼に伝えられて、これらの間で完成をみた語り物に依拠するものとの推測を立ててみたい。そこで、まず述べてみたいのは、文体の面からみた延慶本々説話の語り物的要素についてである。その語り口は、まさしく悲涙にみちた女流念仏唱導のものである。

語り物は、口承文芸の一ジャンルとして、その存在様式は、常に、可変、流動的であり、演奏の一回一回が口語りによる新たな

る創造の姿を呈するという側面を本来的に伴っている。しかし、その故にまた、これら口語りが構成されるための説話モチーフ、修辭上の原則性、通則性が不可欠な要素となる。こうした口語りの要素の分析が試みられたものに、最近の山本吉左右氏の研究がある。氏の分析は、説経節、替女歌を通じて行われたものであるが、口頭による民間語り物の通時的性格を想定しつつ、延慶本六代説話の詞章が持つ口語りの要素をみてみる。

〔延慶本〕

家中ノ上下声ヲ揚テヲメキ叫フ。
猿程ニ斎藤五兄弟二人色ヲ失テ申ケルハ、我等既ニ七重八重ニオシマキテマキレ出サセ給ヘキ隙候ワストテ涙ヲ流スメリ。女房共ハ余ノ浅猿サニ物ヲタニモ云ハス、目ヲ見合テ泣合タリ。母上ハ若君ヲ懐奉リ給テ、只我ヲ先ニ失ヘントモタヘコカレ給フ。御メノトノ女房モ前ニ倒臥テ共ニヲメキ叫フ。日来ハ物ヲタニモ高クイワテ忍テ居給タリケレトモ有ト有ケル者ハ声ヲ調テ泣悲モ理也。

右は六代捕縛の場面の一部である。参考のため語り系の覚一本

〔覚一本〕

斎藤六はしりまは(つ)て見けれども、武士ども四方を打かこみ出し奉るべしとおぼえず。めのとの女房も御まへにたふれふし、こゑもおしませおめきさけぶ。日ごろは物をだにまたかくいはずしのびつゝかくれるたりつれども、今は家の中ありとあるものこゑを調べて泣かなしむ。

と対照したが、双方の詞章構成上の差異は一見して瞭然である。即ち、延慶本の本文は悲嘆をあらわす類義語の著しい反復がみられ、しかもこれら悲嘆句で必ずセンテンスを閉じるという法則性をみせており、いずれも口語り特有の現象とみられる。延慶本の本説話は、まさしく悲嘆句の洪水といった様相を呈しており、例えば、これら悲嘆句のうち、「涙を流しけり」「涙に咽ける」といった表現だけを取りあげても、ほぼ二十例にのぼり、その殆どが文末に用いられ、次のセンテンスとの間を連結する作用を果たしている。

また、同時、同義語の反復も本説話の著しい特徴である。例えば、「血ノ中ヨリ生シ奉タリツル若君」、「血ノ中ヨリ生立テ」、「血ノ涙ヲ流テ」といった表現の反復は、一種の土俗性を感じさせるとともに、母なる性の怨念を漂わせて、民間の女語りを彷彿させるところである。

日来平家ノ子孫共尋テハ或ハ首ヲ切り指殺シ、或ハ水ニ沈メ土ニ埋ムナムト母上聞置給ケレハ、哀我子ヲハイカニシテカハ失ワムスラム、是ハヲトナシケレハ首ヲ切ムスラム、イタジトヤ思ワムスラム、怖シトヤ思ムスラム。何ナリケル契、イカナリケル罪ノ報ヒニカ、ルウキメヲスラム。

右は、六代を北条の手によって拉致された母君の悲嘆場面の一部である。明確な対句表現の反復によって、独特な口語りのリズムを構成し、悲嘆の情を際立たせている。

さて延慶本の本説話は殊に念仏唱導文芸としての性格が濃い

同じく念仏唱導の語り物の代表的なものとして、説経節『中将姫御本地』との比較を行つてみる。この語り物は冒頭に「さる間、和州もちだのこほり、たへまのまんだらの、ゆらいをくわしく尋るに」とある如く、本来は当麻曼陀羅の絵解ぎに発するもので、作品中にも阿弥陀化身の尼による曼陀羅絵解ぎの場面が登場する。物語の結末は、紫雲たな引き、妙音聞え異香薫ずる中を中将姫が、弥陀三尊、諸菩薩に導かれ極楽往生を遂げるというものであるが、この場面は、当麻寺の中将姫の来迎会として、今日なお行われるところである。

来迎会即ち迎講は、「望ましい幻想的弥陀来迎の様相を具象的に演出した」⁽⁶⁾きわめて演劇的要素の濃厚な宗教行事である。詳しくは後に触れるが、これは平安末期以降鎌倉期において殊に隆盛をみ、その指揮演出者は俊乗房重源の如き念仏聖⁽⁷⁾であった。この迎講はまた、絵に描かれて迎接曼茶羅⁽⁸⁾と呼ばれ、これによる絵解ぎが行はれたことも間違いない。

中将姫の語り物は明らかに、こうした迎講、曼茶羅絵解ぎといった唱導芸能を背景に胚胎をみており、延慶本六代説話も構想上同じ生成基盤を持つものと思われる。次は六代と中将姫の斬られる場面を対照したものである。

〔延慶本〕
若君此御返事トオホシク
テ、二度ウナツキ給ケル心
〔中将姫御本地〕
中将ひめ聞召、御なみだともろ
共、しきがはのうへにおしな

延慶本平家物語における文覧・六代説話の形成

ノ内コソ悲ケレ。サテ西ニ
向テ今ヲ限ノ念仏ノ御音モ
乱テソ聞ケル(中略)サ
レハ御免ノ無ニコソ日来ナ
シミ奉テイカニシ奉候ヘシ
トモ不覚トテ北条涙ヲ流
シケリ。家子郎等モ皆袖ヲ
ソヌラシケル(中略)若君
又宣ケルハ、構テ参付宮仕
能マスヘシ。我ナケレハト
テ母ノ御事少モ日来ニ替テ
オロカニ思奉ナナムトオト
ナシク宣ケルソ糸惜キ。日
モ晩ニケレハサリトテハト
クノト勸ケレトモ親俊以
下ノ家子郎等モ涙ノミ流テ
辞シハリテカ及ハストノミ
申

をり、右の御たもとより、じやうど経を取出し、さら／＼とをしひらき、かろうびんなる御声にて、どくじゆ有こそしゆせうなれされども姫君、父大臣に、なごりやおしかりけん、ひとへにおつる泪、ふる雨にことならず、(中略)水から、心のゆかん程ば、念仏を申さんに、十ねんおはらば、くびをとれと、たけ成御ぐしを、きり／＼と、からはにあげ、にしに向て手を合びとれと、の給へば八郎、太刀ぬきもつて、御くびきらんとしたりしが、御すがたを見奉れば、あまりあへなく、太刀をかしこにからとすて、なくより外のことはなし

最期の場に臨んで、幼い者が静かに念仏を唱えて示す殊勝な態度(——線部)は、あたりに涙の渦を巻き起こし(……線部)、最後に、いたわしさに手をつかねている斬り手の心情は聴衆のそ

れと同化し、互いの涙は混り合う（〜）(A)(A)。幼者を主人公にした念仏唱導文芸の頂点を示す場面であり、両者はその構想、詞章構成の面で著しい共通点をみせているといえる。

さて、以上の危機を経て、あわやという場面に、六代、中将姫は救われ、後者は結局弥陀の来迎を受けるわけであるが、注目してみたいのは、六代救出譚の劇的性格である。

六代の乳母は高雄に文覚を訪れ、六代助命を願ひ出る。文覚はそれをいとおしめ、六代を斬らんとする北条を説き伏せ、二十日の延命を得て、その間に鎌倉の許し状を得んと鎌倉に馳せ下る。しかし、むなしく日限は過ぎ、駿河千本の松原にて「今ハ切モヤシツラムト云ツル時」、間一髪、墨染の衣に葦毛の馬を乗りなしたる僧が頼朝の許し状を携えて馳せ付ける。文覚の命を受けた弟子の一人である。

今日の大衆演劇のクライマックスにも似たこの劇的プロットは、当時の文芸には見当らない種類のものである。延慶本は、文覚の言を「仏ノ来テ宣ヤラム」とするなど、その宣揚の意図があらわで、語り生成の背景を視かしているが、それと同時に、このプロットの基底をなすものについて考えてみたい。

先に触れた迎講は、その濃厚な演劇性故に当時の貴賤の間でもてはやされ、殊に天王寺西門は極東東門に直結する地として、迎講が最も隆盛をみた地であった。難波の海に夕陽が沈まんとするかなたから、華麗な装束仮面に身をかためた阿弥陀、観音、勢至などが、念仏の合唱、伎楽の音の満つる中、ゆっくりと行道しつ

つ来たり、待ち受ける念仏行者を極楽へ誘ひゆく。浄土の實在を信じた当時の貴賤には、まさしく法悦の感涙が催される一瞬であったに相違ない。

この一種の宗教劇は、先にあげた重源など念仏聖によって指揮され、主役を演ずる菩薩衆は「多くは念仏衆と称せられる僧俗の混成」⁽⁹⁾によって構成されたと思われる。重源が渡辺別所などに装束を置き、盛んに迎講を指揮したことは先に触れた。

さて、この迎講が単なる念仏唱導の儀式にとどまらず、その豊かな演劇性、従って娯楽性故に、芸能としてさまざまなヴァリエーションを遂げていったことは、今日各地に残存する来迎会や地獄芝居がこれを証明している。例えば、千葉県の無形文化財に指定されている虫生むしうの「鬼来迎」⁽¹⁰⁾は、賽の河原にさ迷い、鬼にさいなまれる幼児、亡者を地藏菩薩が救うという救助譚の形をとる念仏狂言である。

私は、延慶本の文覚の六代救出譚もかかる念仏信仰を奉ずる念仏比丘尼によって演ぜられたところの、迎講を基盤とする念仏唱導芸能の一ヴァリエーションを原拠としていと推定する。そして、いま一度本説話における文覚の位置の重要性に眼を向けてみたい。天王寺、渡辺一带は、さまざまなる芸能の徒が集い、かかる念仏比丘尼の語りの発生には、まさに恰好の地であった。

渡辺は、「水霊奉仕の女人唱導」⁽¹¹⁾の地であったが、延慶本の六代説話には、こうした水辺の女流唱導者が管理した説話モチーフが取り込まれていることに注意したい。六代の妹君、夜叉御前は、

兄との別離に及び、

兄御前ハイツチヘソヤ。母御前トモツレ給ワテ、只独ハイカニ。
我モ行ム、母モ乗給ヘトテ走出給

と、愁嘆を盛り上げる人物である。この夜叉御前は後に、兄の捕縛を悲しみ川に身を投げるといふ入水譚のモチーフをとる。次は、夜叉御前の説話モチーフを三つの要素にわけた『平家』諸本の異同である。

	延慶本	盛衰記	四部本	長門本	屋代本	寛一本
夜叉御前の名	○	○	×	×	○	×
別離の場面	○	○	○	×	○	○
夜叉入水のモチーフ	○	○	○	×	×	×

さて、右のうち三つの要素を全て記すものは、延慶本と盛衰記であるが、盛衰記では入水したはずの夜叉御前が後に再び登場するという、構想上の破綻をみせており、完全なものは延慶本のみである。

夜叉御前の名の女性が、河川に身を投じ、後に水神として祀られるという伝説は各地の民間伝承として残存している。例えば、『近江輿地志略』坂田郡池下村の項には夜叉ヶ池の存在が記されている。池に水なきを憂えた佐々木秀義が此夜叉御前なる女性を生きながら池底に沈めたところ、以後池は常に満水を保つという

延慶本平家物語における文寛・六代説話の形成

ものである。人々はこれを水神と祀ったが、深夜になると、夜叉御前と一緒に沈めた機織の音が聞こえるという。

いわゆる夜叉ヶ池伝説、機織伝説であるが、こうした伝承の背景には、水辺に仕え、水神を祀る巫女系の唱導者の存在が考えられる。¹³⁾『平治物語』に登場する、頼朝の妹夜叉御前も美濃青墓の杭瀬川に身を投じるが、この青墓の地は『傀儡子記』『梁塵秘抄口伝』にみられる如く、古来傀儡系の遊行巫女の蟠踞するところであり、種々の語り物¹⁴⁾の主要な舞台ともなっており、かかる女流唱導の徒の管理するモチーフがはいり込んだものと思われる。

夜叉御前の名に入水のモチーフは必須のものであり、その点で延慶本の夜叉説話は正系を伝えるといえ、『平治物語』との直線的関係ということではなく、文寛発心譚と同じく渡辺という渡渉地帯に依拠する念仏系の女流唱導者の伝承が顔を覗かせているといえよう。

註(1)(2) 水原一氏「維盛・六代説話の形成」(『平家物語の形成』所収)。

(3) 「説経節の語りと構造」(『東洋文庫』『説経節』所収)。

(4) 日本古典文学大系本による。

(5) 横山重氏編『説経正本集』第三所収のものによる。

(6) 伊藤真徹氏「迎講の一考察」(『仏教文学研究』四所収)。

(7) (6)に同じ。

(8) 石田瑞磨氏「待生の思想」二二三頁。

(9) 伊藤真徹氏前掲論文。

(10) 三隅治雄氏前掲書一〇二頁による。

(11) 近藤喜博氏前掲「難波の渡辺党」。

(12) 歴史図書社版『校訂頭註近江輿地志略』九七二頁。

(13) 中山太郎氏『日本巫女史』二四九頁。

(14) 例えば幸若舞曲『烏帽子折』、或は説経『小栗判官』の照平・小栗の美濃垂迹のモチーフについて、福田晃先生は青墓、墨俣川辺の念仏者の唱導を推定されている。(「小栗」語りの発生―馬の家の物語をめぐって」(下)、日本文学1974―5)。

おわりに

延慶本の文覚発心譚並びに六代説話は比較的語り物としての原態を保ちつつ収録されており、これらの生成源は念仏比丘尼の唱導という糸によってたぐられるのではないかと考えた。そして、具体的には、渡辺、天王寺一带に依拠する重源影響下の女流唱導を、念仏系の民間語り物、唱導文芸の視座の中で捕捉せんと試みたつもりである。そしてまた、これも結局のところ、『平家』の成立過程の一端の解明を最終的な目的とせんことを念じてのことである。

(こばやし・よしかず 本学大学院博士課程)